

魂ひと

曲目は唱歌や1960年代の歌謡曲など。「実はギターより歌の方が自信あるんですが、歌をほめられたことはありません」と笑う。病院スタッフによれば、音楽は入居者により刺激をもたらすそうだ
—鎌倉市腰越の鈴木病院



ひらり放課後

音響機材持参でボランティア演奏

「死」から考える「よい生き方」

村田 則幸さん「60」

果音を付けたりするエフェクターなど、自前の音響機材を駆使し、ギター一本とは思えない華やかで迫力ある伴奏を行う。間奏のギターソロはさすが元プロ。ノリがよくキレのあるアドリブ演奏が決まっている。

高齡の入所者やその家族が集まったほか、ベッドに寝ている入所者にも聞こえるよう病院スタッフが各病室のドアを開けてくれた。

「ご家族も来てくれてよかった。だって親御さんの笑顔や歌声を見聞きできるのはうれしいことだから。私も、晩年の母がデイサービスに行くこと、そっと様子を見に行ったものです」

● ● ●

ボランテアに積極的なのは葬儀サービスという仕事の影響が大きい。「死は遠い人ごとではないとわかると、「死」から「今」を見るようになったんです」

多くの告別式に立ち会いこう思う。「生前、周りの人に心配りしていた人は、たくさんの方がその死を悼

み、遺族を温かく手助けしている。自分もそんな死を迎えたい。人の役に立つことをしたい」。それが、ギターで高齡者に音楽を楽しんでもらうことだった。

「明日はどうかなるかわからないから」、すぐ行動するようにもなった。ボランティアの日程も「この日はどうですか」と率先して決めていく。「勇気はいらない。いるのはやる気です」

音響機材を運ぶ体力がなくなったら、近所の高齡者を対象に自宅で歌声サロンを開きたいという。もちろん伴奏は自身のギター。弾き語りや葬儀という二つの経験が融和し、豊かな実りをもたらしている。

(文・北川原 美乃
写真・浅川 将道)

「ギターに初めて触れたのは小学校6年生のときです。グループサウンズの全盛期で、友達のお兄さんのギターでした」。中学1年の夏休み、自宅近くの由比ヶ浜の海の家で毎日アルバイトをし、あこがれのギターを買った。

独学でのめり込み、大学時代にはナイトクラブでギター弾き語りのアルバイトを始めた。卒業後そのまま

弾き語りを本業にしたが、40歳で転職。現在は冠婚葬祭サービス会社に勤務し、葬儀部門で霊きゅう車の運転などを担当する。

その一方、デイサービス施設などでギターのボランティア演奏を行ってきた。

2009年に、中学時代からの音楽仲間から車を無償で譲り受け、本格的な音響機材を持参し月3〜5回訪

この日は鎌倉市にある鈴木病院の介護棟を訪問。友人でジャズ歌手の方緒千恵子さん(60)も同行したことしから、歌とトークを時折手伝ってもらっている。

● ● ●

打楽器の音でリズムを刻むリズムマシンや、エレキギターの音色を変えたり効

ボランテアに積極的なのは葬儀サービスという仕事の影響が大きい。「死は遠い人ごとではないとわかると、「死」から「今」を見るようになったんです」

多くの告別式に立ち会いこう思う。「生前、周りの人に心配りしていた人は、たくさんの方がその死を悼

み、遺族を温かく手助けしている。自分もそんな死を迎えたい。人の役に立つことをしたい」。それが、ギターで高齡者に音楽を楽しんでもらうことだった。

「明日はどうかなるかわからないから」、すぐ行動するようにもなった。ボランティアの日程も「この日はどうですか」と率先して決めていく。「勇気はいらない。いるのはやる気です」

音響機材を運ぶ体力がなくなったら、近所の高齡者を対象に自宅で歌声サロンを開きたいという。もちろん伴奏は自身のギター。弾き語りや葬儀という二つの経験が融和し、豊かな実りをもたらしている。

(文・北川原 美乃
写真・浅川 将道)